

## セインズベリー日本藝術文化研究所

3月まで約半年の滞在地となる東部イングランドの都市ノリッチは、ノーフォーク州の州都で、人口は約13万人。最初の1週間を過ごしたロンドンに比べると小さな町だ。秋も深まる10月初め、ロンドンから2時間ほどの鉄道の旅をして、町外れの駅に着き、お世話になるセインズベリー日本藝術研究所にタクシーで向かう。出迎えてくれた研究所のサイモン・ケーナー文化遺産センター長は、ともに学生だった25年前、ケンブリッジ大学の調査隊による桜井市三輪遺跡の発掘調査で知り合った旧知の間柄であり、天理の詰所で合宿をした思い出話などで旧交を温めるとともに、さっそく研究所のスタッフに紹介をしてもらった。

研究所は、イースト・アングリア大学に附属し、同大学の日本学センター、セインズベリー視覚美術センター、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)、大英博物館、日本国内の幾つかの教育研究機関と連携しながら、日本の芸術・文化に関する研究を進め、国際ネットワークの構築をはかっている。研究所のプロジェクトに含まれるのは、日本美術・文化資源、日本考古学・文化遺産、そして現代日本映像メディアの3つの分野だ。

## 町に残る中世の面影

日本考古学を専門とするケーナー博士は、日本と英国・欧州の考古学・文化遺産研究を橋渡しするプロジェクトを数多く手がけていて、私が到着した翌日にも、新潟県長岡市からの来客があり、2日間、市内の見学をご一緒させていただいた。最初に案内された大聖堂は、研究所のすぐ隣にある。というよりも、実は、研究所自体が、大聖堂の境内にあると言わねば、部屋にいと、趣のある鐘の音が真横から鳴り響いてくる。大聖堂は中世のノルマン朝期に建築されたもので、1096年に着工し、完成に50年を要したという。ノーフォークには良質の石材がなく、ノルマンディーから海を越えて運んだ石灰岩を用いたとのこと。1480年に再建された尖塔は、ソールズベリー大聖堂に次ぐ96mの高さを誇り、空を貫くかのような。英国最大の2階建て回廊は、1297年の着工で、見事な彫刻の数々が天井を飾る。大聖堂の敷地に入出入りする門の一つ、セント・エセルバート・ゲート(St Ethelbert's Gate)は、1320年頃の建築で、アーチを装飾しているのは、ドラゴンに対峙する武装した聖者の像の彫刻だ。



写真1 ノリッチ大聖堂(筆者撮影)

解説によると、中世の半ばから18世紀まで、イングランド第二の都市だったノリッチは、ロンドンに出るよりは、船でオランダに渡る方が近く、16世紀には、都市の人口の40%がデンマーク、フランドル、ノルマン、ブレトン、ユダヤ人などの移民だった。その後、産業革命の波に乗り遅れ、町を囲んでいた城壁こそ壊されたものの、旧市街の中心は大規模な再開発

を免れて、歴史的な町並みや建築の多くが現代まで伝わったという。ヨーロッパ最大という城壁都市の構造は中世から変わりがなく、旧市街の内側には、32棟の教会が残されていて、一都市としては、アルプス以北で最も数が多いらしい。聖者の名前を冠した各教会は、宗教を軸にして、当時、都市の自治を支えた有力者の組合組織、ギルドによって建てられたものだ。町の中心には、15世紀から1938年まで市政に用いられたギルド・ホールがあり、毎週金曜日には、ツアーが開催されて一般公開されている。すぐ横の広場には、11世紀後半から今日まで続く英国最大の野外マーケットがあり、ぎっしり並んだ小さな店々が賑わっているのも珍しい光景だ。

石畳の道を歩き、かつて水運に利用されて町の繁栄を支えたウェンサム川を眺め、1507年の大火後に再建された家々の外



写真2 エルム・ヒル街(筆者撮影)

観が当時と同じままに残るエルム・ヒル街を通り抜ける。次に訪ねたドラゴン・ホールは、1427～1430年に建設され、中世の商業ホールとしてはヨーロッパ唯一のものらしい。2階のホールは木組みの天井が吹き抜けになっていて、梁の欄間を見事な透かし彫りのドラゴンが飾る。第一級登録建造物(リステッド・ビルディング)に登録されたこの建物は、市のカウンシルの所有だが、今年から、読んで、書いて、翻訳するという文筆活動を広範に支援するチャリティー組織のノリッチ作家センターが管理を任されて、事務所として利用しているという。見学の初日はこれで終了。長岡市の一行が宿泊しているホテルもまた、13世紀から続く歴史があり、1587年には、エリザベス女王が宿泊したという。

翌日は、ヨーロッパで最も壮大なノルマン朝期の建築のひとつ、ノリッチ城(1067年～1075年)を案内してもらおう。少し小高くなった丘の上に聳えるこの要塞は、当初、征服王ウィリアムの王宮だった木造建築を、12世紀に石造に改築したものだ。その後、14世紀から19世紀には刑務所として用いられ、1894年に博物館となった。現在、町の歴史を伝える数々のコレクションの他、古代エジプトや自然史の展示がされている。

2日間、町を歩いてすぐに感じたのは、町の歴史、あるいは、町そのものが大切にされながら、同時に、「使われている」ということだ。歴史的な建築が日常の営みの中で普通に用いられ、内装は新しくされても、建物の外観は損なわれていない。新しい建築も、周囲の歴史的な景観と調和した外観になっている。視界を妨げる電線が市街に全く見られないのは言うまでもない。このような町づくりはいったいどのようにして進められているのだろうか。